大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

「気」の養生思想の研究：鍼灸美容における身体美の原点

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 王, 財源 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002524

「気」の養生思想の研究

―――鍼灸美容における身体美の原点―――

大阪府立大学大学院博士後期課程
人間社会学研究科人間科学専攻（文化形成論分野）
王　財源

論文要旨

本稿は、「美」や「美容」が鍼灸学のなかで中国伝統医学と中国哲学を通じてどのように成立するのかを総合的に考察したものである。「気」の思想を構築した漢代や六朝時代の注釈書などの内容的検討を行うことで、現在の中国医学を基盤とした鍼灸美容の研究および教育に還元できるものと考える。まずこれらを研究するに至った背景を述べる。

近年、鍼灸や漢方が現代医学を補助する補完代替医療として、複数の疾病に対してその治療効果の多様性が示唆されている。とりわけ鍼灸は美容効果を促すことから、ここ数年、顔面鍼による美顔方法が装飾美容として注目されてきた。

ところが現在の鍼灸美容は、顔面部への力学的な物理刺激のみに終始するのみだが、それを伝統的な鍼灸による美容と称する臨床家が多いことに疑問を感じる。

人間に備わる恒常性維持機能を始めとする、心身に備わる生命力こそ、内面よりの美しさを守り、自ずと外面の装飾美容へと波及できる。ここには古代中国の「気」の思想がそこに深く関わっている。

鍼灸美容は装飾美容にはない自己の叡智と、自身の弱さと向き合えるような逞しさと、しなやかな人間美の輝きのなかに、自身を装飾する外面の「美」に繋がっている。そのことは『管子』や『黄帝内経』などに記されている。換言すれば術者と依頼者の中にこそ、「美」の共同創出者となる鍼灸美容の原点がある。

そこで本稿では、中国古代の哲学理論を背景に形成された養生思想を根幹とした美容について、今後の鍼灸学が果たすべき役割について論及した。それらは先行文献には未だ明らかにされていないものである。

「気」の養生思想の研究は数多い。『五十二病方』には、灸や鍼、薬草を使った治療が存在し、『養生方』『胎産書』『天下至道談』等々には、当時の養生延命法が記されていた。そこには『導引図』にみる「気」を用いた運動法が説かれ、後の張家山漢墓より出土した『引書』や『脈書』なども「気」の記載が多く見られた。とくに『脈書』などは馬王堆の『陰陽十一脈灸経』『脉法』『陰陽脈死候』と重複する部分があり、これらが後世の医書『黄帝

内経』を形成する上での祖形となった。馬繼興『出土亡佚古醫籍研究』に詳細な考察がある。さらに「気」「養生」「道」などをキーワードとした日中間の考察には、黒田源次『気の研究』、小野沢精一他『気の思想』、朱越利「養生延命録考」、丸山敏秋『黄帝内経と中国古代医学』、坂出祥伸『中国古代養生思想の総合的研究』、坂出祥伸『道教と養生思想』、福井文雅『中国思想研究と現代』、加納喜光『中国医学の誕生』、坂出祥伸『気と養生』、大形徹「気系の病因論:張家山漢簡を中心として」、橋本高勝『中国思想の流れ両漢・六朝』、アンリ・マスペロ『道教の養性術』、小曽戸洋『中国医学古典と日本』、坂内栄夫『道教の生命観と身体論』、吉川忠夫「眞誥研究（訳注編）」、石田秀実『東アジアの身体技法』、三浦国雄『不老不死という欲望』、盖建民『道教医学』、森三樹三郎『中国思想史』、瀧澤利行『養生論の思想』、坂出祥伸『中国思想における身体・自然・信仰』、邢玉瑞『黄帝内経』、宮川浩也「馬王堆医書『養生方』の写真版再考」、浅野裕一、湯浅邦弘『諸子百家〈再発見〉』、大形徹「魂魄概念と鍼灸」日本鍼灸史学会論文集、張灸甲『黄帝内経文献研究』、堀池信夫、砂山稔『道教研究の最先端』、張継禹『道蔵養生』、程雅君『中医哲学史』、烟健華『《内経》学術研究基礎』、葛兆光著、大形徹ほか訳『道教と中国文化』、林富士主編、中央研究院叢書『中国史新論』等々の研究成果がある。上記の論著は本論文を執筆するうえで適宜、引用、参照し、「美」を創出する方法の原点を「気」の養生思想に淵源を求めた。

また、これら論著には医書『黄帝内経』の引用が随所にみられたという点を考えても、『黄帝内経』が健康で若々しい肉体を論じるうえで、「気」の養生思想が基本概念となっていたことが理解できる。故に、「気」と「養生」思想は「美」を論じる上で貴重な資料となるので、詳細は参考文献として章末に載せた。

論文の構成とその要旨について、第一章の序論では研究の背景や研究方法、先行研究について論じ、第二章から第四章は本論、第五章が結語とまとめである。

第二章の「《気》と身体について」では、不老と長寿を実現するための中国伝統医学にみる「気」について、先人によって伝えられた「気」と養生思想との関係を、文献を通じて分析し、身体における「気」の生成や種類、生理的な働きについて言及した。とりわけ喜怒哀楽などの心理的な影響が「気」の働きに作用し、それが経絡を介して蔵府の機能に波及することを、古典医書などを通じて明らかにし、「気」の養生法が心身の調和を維持させ、不老長寿の養生思想と結び付いていることを論じた。

第三章の「《気》の養生と《美》の観念」では、「気」の養生法が不老長寿を実現させ、肉体的な健康と深く結びついているという従来の定説に対して、本稿では従来の研究にはみられなかった「気」が「美」を創出する上での基本的な概念として成立するという可能

性を論じ、それらを「美」の起源に萌芽をみた古代中国の「美」の文化を用いて検討を加えた。そこには養生術と共に発展した医学との結び付きや、先人らによる美学思想上の特徴や、「気」の養生法と美容学の関係を分析した。また、「美」の創出を妨げる原因についても言及し、中国伝統医学の病因論を基礎として成立した外感六淫（気候や気温）や内傷七情（喜怒哀楽などの感情が肉体を損なう）と美容との関係性、また、飲食と美容の関係性についても論じた。

とくに内傷七情は、こころの働きがそのまま身体における諸行動へと波及することである。そこには、各々を取り巻く環境や経験が異なり基準がない。「美」における価値観も同じである。人体が五官より取り入れた情報により「美」を判断する。

人は見る、触れる、匂いを嗅ぐことで、それぞれがもつ価値観での「美」意識が発生し、「美」を創出させて「こころ」と「形」の間で調和を保つようにしている。それらが「気」の養生法に影響を与えることから、「気」の流れる十二経絡よりみた肌膚や顔貌について分析した。

第四章の「鍼灸学による身体美の創出について」は、本稿の中核となる部分である。先秦より魏晋南北朝時代までの諸子百家別に分類された「美」の思想には、中国伝統医学にある『霊枢』本蔵編などの概念と密接な関係をもつものがある。それらを『論語』雍也編などと比較して、人間の内面と外形について言及し、人間の本質的な「美」について再度検討を重ねた。後の『抱朴子』外篇では「之を求むるに貌を以ってし、之れを責むるに妍を以てす。俗人徒に其の外形の粗簡を睹、其の精神の淵邈を察する能わず」とあり、これらの概念が漢代初期の『淮南子』の形神観にも通じ、伝統医学のもつ内外合一観と一致することを明らかにした。これら文献論証を基礎にして、いまだ東洋医学では考察されてはいない「美」と伝統医学との関係について検討を加え、伝統文化にみる養生法が、疾病の治癒のみならず、美容にも波及効果を及ぼすことを明らかにできた。養生による若返りの法則は『黄帝内経素問』を基盤としているが、医書にみえる生命観や「美」と強く結びついていることを指摘した。これはこれまでにはない独創的な見解である。

養生による「若返り」の法則を再考し、医学書である『黄帝内経霊枢』が、皮膚美容と深く結びついていることを分析した。それらの内容は理論のみを考察したものではなく、『霊枢』根結編に記された身体の具体的な処方穴を用いて実際の実践法を明らかにし、従来から行われてきた「気」や「神」の養生学説を定説とした健康や疾病の治癒に対する『黄帝内経』の概念を、「美」の創出と結びつけて考究した。

また、「美」の本質について考察するために、古典文学にみえる古代の人間観に対する「美」と「美容」について再考し、人間にとって必要とされる本質的な「美」について分析し、論証を試みたのである。

以上の内容を鑑みながら、中国伝統医学に基盤を置く東洋医学における「美」の創出を実践するための方法として、古典医学理論を現代に蘇らせて考案したのが、『黄帝内経霊枢』九鍼十二原篇によって生まれた古代九鍼の新しい応用法である。

本稿では『霊枢』九鍼十二原篇に載る古代九鍼と、民間普及した刮痧術との組み合わせによって、気血を誘導して肌を美しくするための刮痧美容法、審美六鍼について論じた。審美六鍼とは古代医学で使用された九種類の鍼のなかで、複雑な顔面の形態に最も適した美容用の六種類の鍼のことである。これら古代鍼を「美」を引き出すための刺さない鍼として現代に蘇らせて、「美」と「ケア」の実践方法について論じ、そこに記された「気」の理論を根拠とする古代鍼を用いた「美」の創出方法についても考察した。

それら古代鍼の科学的な有効性については新潟大学免疫学教室の渡邊真弓先生の協力を得て科学的検証を加え、米国の医学雑誌“Health”（Vol.4,No.10,775-780）に「古代鍼を用いた施術が体温、免疫機能と自律神経系に及ぼす影響」と題して 2012 年に英論文で掲載された。

これらの検証では二千年の歴史をもつ鍉鍼などの接触鍼が、自律神経系の調節を通じ、体温、脈拍数、カテコラミン分泌および免疫機能に対する影響に効果を及ぼし、刺入鍼と類似した効果が期待できることから、組織損傷や感染問題の予防策として貢献できる可能性について論及した。

以上、中国古代の哲学思想が「美」の創出と如何に結び付くかを検証し、その背景には道家思想を中心とする養生術が、医術の発展にまで影響を与えたことにより、従来、古典文献で定説とされた中国伝統医学が目標とする疾病の治癒促進の他に、「美」の創出が深く繋がることを論証した。

第五章では残された問題の所在と今後の課題について述べた。